

小倉志祥

## 『M. ウェーバーにおける科学と倫理』

清水弘文堂 1971(再版) 274 ページ

1 M・ヴェーバーが社会学において占める位置の大きさについては、改めて指摘するまでもないが、それはたんに社会学のみに留まるものではなく、経済学においてもまた、その足跡の大きさは広く知られるところである。そして我々はすぐに、大塚久雄、青山秀夫、出口勇蔵氏などをはじめとする多くの経済学者による幾多のヴェーバー研究を、念頭に思い浮かべることが可能であろう。さて彼の著作は膨大な量にのぼるが、そのなかでも社会経済史学に大きな影響を与えたものの一つとして、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904—05)を挙げることに、多くの異論はないと思われる。なおここで、我々が看過しえないことは、それが資本家・企業家精神の形成に果たしたドイツ中産社会層のプロテスタンティズムの役割を解明するだけにとどまらず、同時に歴史学派による既存のドイツ資本主義分析に対する明確な批判そのものでもあるということである。従って、例えばこの著作一つをより深く理解するにしても、我々は彼の歴史学派に対する批判の方法論的基盤にまで溯って検討しなければならぬであろうし、殊にこの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のように、一連の社会科学方法論の論文が発表されている時期に完成されたものは、たとえ社会経済史の領域に属する業績であっても、社会科学方法論上の態度と深くかかわるものであることは、否定し難いと思われる。そこに、我々がヴェーバーの社会科学方法論をも検討せざるをえない背景が存在すると同時に、またそのことの意義も存在するのである。

M・ヴェーバーの歴史学派に対する批判は、ヘーゲルの論理、すなわちここではいわゆる“流出論”への批判の延長上において行われていること、また彼の客観性や理想型などの概念も、歴史学派の自然主義的態度や有機体論的発想への積極的批判の意味を有するものであることに留意しなければならないであろう。それゆえに、我々経済学を学ぶ者にとっても、彼の社会科学方法論に対する理解が要求されるだけでなく、加えて『学問論文集(Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre)』の位置が、ドイツ観念論や新カント学派などとの関係にお

いて、明らかにされるのが、必要にしてまた有効であると考えられる。この小倉志祥氏の『M・ウェーバーにおける科学と倫理』は、その要請に十分答えるところのものである。

2 著者の小倉志祥氏は、カント学者としてよく知られる哲学者である。従って、この書はこれまでの多くの社会科学者の手になるヴェーバー研究とは異なり、哲学者によるヴェーバーの社会科学方法論研究である。それゆえに、それはまた我々社会科学を専攻する者にとっても有益な示唆を含むものであることは、改めて指摘するまでもないであろう。さて、本書の意図は、ヴェーバーにおいて「実存思想と社会科学との関連」を考えることであり、また彼の心情倫理と責任倫理の対立の背後にある倫理感が、「現代を如何に生きるべきかに対しても指針を含む」点を主体的に受けとめたいうで、ヴェーバーの科義を学と倫理を統一的に把えることによって、その今日的意再評価しようとするものである。しかしながら、この本来の意図が十分に達成されているかどうかについては、若干の疑問が残ると思われるし、またそのような意図に対して、果してこうしたアプローチが適切であったか否かにも、やはり疑問が残るであろう。しかし、その大部分のページが費されているヴェーバーの科学論の分析こそが、我々社会科学を学ぶ者にとってきわめて有益なのである。

『M・ウェーバーにおける科学と倫理』は、ヴェーバー自身の区分を手がかりとする4つの章から構成されている。すなわちそれらは、第1章文化科学の基礎理論、第2章現実科学の基礎理論、第3章了解科学の基礎理論、および第4章倫理学の基礎理論、の4章である。ヴェーバーは、この前三者、文化科学、現実科学、了解科学を区別なく使用しているが、もとよりその力点の置き方には相違があることは言うまでもない。その点を十分考慮に入れて、まず第1章では、法則定立的な自然科学と異なり、個性的現実を認識の対象とする文化科学では、認識の存在拘束的側面は看過されえず、従って認識主体の価値の問題は不可避的ださえあるが、その価値をめぐる諸問題が体系的に論じられている。特に価値関係ならびに価値解釈に関する理解は非常に明快であり、それらが人格性の問題と結合されてはじめて、M・ヴェーバーのいわゆる社会科学的認識の客観性が正しく把握されることが明らかにされている。この第1章では、ヴェーバーと親交のあった新カント学派のリッケルトと彼自身における諸概念の相違点などが明瞭に指摘されており、彼と新カント学派の距離を知るうえでも有意義である。第2章は、

価値概念に基礎づけられた文化科学とは異った視角から、すなわち因果概念の次元から、この多義的な現実を解明する現実科学の問題が検討されている。すなわち、社会科学における因果分析の占める位置の重要性が確認されるとともに、因果性を単なる因果連関としてではなく、意味連関として把握する了解科学への展開を俟ってはじめて、ヴェーバーの科学論は円環を閉じることになるのである。こうして第3章は、その対象は価値概念なしに成立しえないが、因果分析そのものは固有の論理を有し、従って因果論を現実科学の基礎として独立に考察しうる根拠が、ここで論じられている。しかしながら、他方因果分析に使用される“法則”の問題を媒介に、我々は“了解”の概念に導かれ、究極的には彼の社会科学方法論において決定的な重要性を持つ諸問題の検討にあてられている。すなわち、それらは了解の概念や直接的体験の概念であり、またその根拠を構成する基底としての明証性の問題であり、さらにまたいわゆる“理想型”の概念構成の問題などである。社会科学に固有なものである個性の人間行為を、その意味連関において了解するという了解的解釈は、“人格性”を前提にしてはじめて成立するものであるが、他方その了解の概念は、普遍的・抽象的世界以前の日常経験を基底とするところに、その意義を持つものである。それゆえに、日常経験の本質を把握する「意識過程の内的直観」である了解の基礎づけは、明証性に求められなければならないことは、今や明らかとなる。こうして了解的明証性の意識内在は「客観的可能性」となるが、その現実的妥当性は検証されなければならないが、その現実認識のための手段として明証的な概念が、理想型として構成されることになるというヴェーバーの科学論の構造が、この第3章ではきわめて明快に解析されている。この第1章から第3章までの分析は、外見上は平面的にみえるが、その実非常に構造的に構成された分析であることを指摘しておこう。そして第4章は、このようにして成立した価値自由な客観的科学において排除されている実践的・倫理的義務と科学的義務との統一の方向を示唆する規範倫理学について述べられている。もとより、その可能性を著者は、ヴェーバーその人の実存に求めるのではなく、あくまでも彼の方法論的基盤における内的関連性のうちに捉えようとするが、これは正統的なアプローチであると言えよう。さて以上が本書の章構成に関する紹介であるが、フッセル現象学のヴェーバーへの影響を正しく把握している第3章のすぐれた分析に、我々は注目したいと思う。

3 これまでの紹介からも容易に察せられるように、本

書は『学問論文集』を中心とした分析であり、さらにいえば、そのなかでも「ロッシャーとクニース」論文の意義に焦点を合わせて分析を行ったものであるといえよう。改めて指摘するまでもないが、ヴェーバーの社会科学方法論を考察する場合、「ロッシャーとクニース」の占める位置は大きく、またその解明の鍵を握るものである。例の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の前後に、一連の方法論関係の論文が発表されているが、かの有名な「社会科学のおよび社会政策的認識の“客観性”」(1904)は「ロッシャーの“歴史的方法”」(ロッシャーとクニース：第I部、1903)につぐものであるし、また「文化科学的論理学の領域における批判的研究」(1906)は、「クニースと非合理性」(ロッシャーとクニース：第II部、1905)と「クニースと非合理性(続)」(ロッシャーとクニース：第III部、1906)の間に発表されたものである。このことから明らかなように、ヴェーバーの方法論は「ロッシャーとクニース」を軸に展開されており、わけてもその第III部が重要性を持つと考えられるのである。何故ならば、フッセルの現象学に依拠して明証性概念による根拠づけが行なわれるのは、この「ロッシャーとクニース」の第III部においてであり、また第II部ならびに「批判的研究」にも、現象学の影響が明瞭に読みとれるからである。しかしこれらが発表されたのが1905～06年であることを考えれば、フッセル現象学の影響も「論理学研究」を中心とする初期現象学からの影響にとどまるものであるといえよう。だがそこには、フッセルがやがて「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」へと発展させたのと同じ問題意識の萌芽を認めることが出来るのは、興味深いことである。従ってこのことは、我々にヴェーバーを現象学的視点から改めて捉えなおすことの可能性と意義を示唆するものであるといえよう。そして小倉氏による本書は、そのための手がかりとしての役割をも果たすものであると考えられるのである。

4 最後に若干の感想を述べて、この書評を終えることにしたい。我々社会科学を学ぶ者にとって、ヴェーバーの社会科学方法論を理解するうえで、本書がきわめて有効なものであることはすでに指摘したところである。しかしながら、もとより本書にも全く問題がないというわけではない。まず第1に、ヴェーバーにおける科学と倫理を実存的視点から統一的に理解するという著者本来の意図は、このように対象を彼の方法論のみに限定することによって、むしろ弱められてしまったのではないかと考えられる。もっともそれでも同様の意図を持つ他の試みに比べれば、はるかに成功していることは疑いないの

であるが、第2に、やや形式的にすぎる整理やわりきりすぎていると思われる個所が、いくつか指摘されうることである。ヴェーバーによる具体的現実の分析をみる時、彼自身においても、もっと混沌とした未整理の部分が在ったのではないかと考えられるのである。最後に第3点として、ヴェーバーの方法論に対する著者の批判的視点が弱いことが、遺憾ながら指摘されざるをえないであろう。理解および整理とは同時に批判をも含むものであり、陽表的な批判的視点の下でのみ真の理解が可能になるといえるのである。例えば、ヴェーバーの第1次世界大戦に対する態度は、彼の社会科学方法論の有効性と限界を知るうえで、良き手がかりと考えられるのであるが、このような具体的問題を媒介にしてはじめて、その批判的視点が獲得されうるのではないと思われる。これら二、三の問題点は残すと考えられるが、毎日のように現われは消えていく本の多いかげろうの如き“出版文化”のなかで、本書のように正当に評価されて然るべき書物が再版されたことは、評者一人の喜びではないと思われるのである。(1971年12月稿) 【清川雪彦】